

集解、稗處處野生、田生俱多能成長、必亂、故生田中以作稻之害、或不時種之、亦能生、大抵種之如粟黍、復有早晚、三月種、七月蒔收、五月種、八月蒔收、惟據土地之肥瘠寒暖、而有遲速、其色黃白赤黑、其名品亦多、作飯作粥、其味不佳、而民間作食、若合稻粟之類、而作飯粥、則味稍佳、或畜小禽而好、

〔農業全書五穀二種〕稗

ひるに水陸の二種あり、是尤いやしき穀といへども、六穀の内にて下賤をやしなひ、上穀の不足を助け、飢饉を救ひ、又牛馬の飼、殊に水旱にもさのみ損毛せず、田稗は下^ひき澤などの、稻のよからぬ所に作るべし、畑びるは山谷のさかしく、他の作り物は出來ざる所に、やきうちなどして多く作れば、利を得る物なり、但山に作る時は、あらく毛のあるを作るべし、鹿鳥の犯さぬ物なり、又年なみあしく、稻の苗をさして後、相續きて早し、苗悉く枯たる時か、又五月洪水にて苗流れ、或水底になりて、腐りたる時も、稗はでくる物なれば、水損ある所はかねてたねを蓄へをき、又は苗をもうへ置、うへつぎて此難をのがるべし、又干潟をひらき穀田となさんとすれども、初の間は潮水もれ來りて、苗かれうせ、稻は盛長せず、毎々手をむなしくする所がらに、玄ゐて稻を作り、妄に費を益べからず、先此稗の苗を長くして種れば、大かたは潮氣にも痛まずしてよく榮へ、其功をなす者也、其後に稻を作るべし、又云、是下品の穀にして、世人賤め、輕しむといへ共、なみ／＼の地にも能いでき、實多く、飯にし、粥にし、餅に作り、其功粟にもさのみ劣らざるものなり、土地の餘計ある所にては、必多く作りて、上穀の助となすべし、相應の地に作れば、甚みのり多き物なり、されば極めて下品の穀なりといへども、貧なる民を救ひ、大きに農家の益となるものなり、又云、潮干潟に作りたらば、刈とる時子のこぼれざるやうにすべし、その實おつれば、次の年稻をつくるに、秀となりて、はなはだ妨をなすものなり、

〔二宮翁夜話〕五翁曰、圍穀十年を経て、少も損せぬ物は、稗に勝れるはなし、申合せて成丈多く積置